

日本語における英語からの外来語

—スペイン語における外来語との比較—

リナ・マリア・コンデ

はじめに

現代の世界では英語が他の言語に対して、強い影響を与えている。なぜかという、昔はイギリス、現代はアメリカも経済やビジネス、娯楽、ライフスタイルなどさまざまな面で、世界を動かしているのが、その影響の一つに言語がある。アメリカ経済やアメリカ企業が世界で幅を利かせていることが、アメリカ英語を「世界標準」の立場になった主な理由であろう。ちなみに、同じ言語を話さない人々がコミュニケーションをする時や、国際的な場で英語はよく使用されている言語である。それ故、英語の単語は世界の多くの言語によく借用されている。

日本語においても、経済、政治、技術、教育、文化の交流の中でよく他の言語から単語を取り入れている。そして、そういう言葉を取って、本来の文法や発音などに基づいて、組み入れることが普通である。

来

「外来語」は簡単に言えば、前は外国語であったものが、日本語の中に取り入れられた言葉である。西洋の言語から日本語に入って来た単語が外来語であるということについてはほとんど異論がない。問題が生じるのは中国語から取り入れられた言葉である。例えば「マージャン」や「ラーメン」などのような言葉はしばしば外来語として扱われるが、いわゆる漢語の多くは昔中国語から取り入れられたが、慣用されてきたので、もう外来語として取り扱われない場合が多い。そのうえ、漢語は歴史が古く、歴史の新しい西洋語系の単語と比べたら、外国語に由来する感じがまれに残っていない。

外来語はもともとポルトガル語、オランダ語からの外来語が多かったが、江戸末期以降は英語、ドイツ語、フランス語などからの言葉も取り入れられてきた。現代は中でも、英米語系の外来語は大変多い。そのために、外来語の代わりに時々「洋語」という言葉も使われているが、中国語や韓国語などに由来する単語もあるので、「洋語」という言葉が「外来語」の代わりをすることは正しくないであろう。

第二次世界大戦の後には前にもいったように、英米語系から取り入れられた言葉が非常に

多くなってきた。なぜかという、英語が職業生活、日常生活の中に重要な意味を持つようになったので、英語との接触の結果で、外来語として、英語の単語は日本語の中に入ってきたのである。

外来語といのはいうまでもなく、日本語だけの事象ではない。大さっぱに言えば、言語の構成の中には他の言語からの借用語が含まれているのである。例えば、スペイン語の中には昔アラビア語からいくつかの単語を取り入れられた。現代には英語からの影響をいちじるしく受けている。しかし、スペインのスペイン語にはそんなに強く影響はないので、そこに限定していると思われる。ラテンアメリカのスペイン語にはラテンアメリカの独特の成長ということもあり、アメリカの近くにあり、アメリカは文化や経済や技術などの影響を与えているので、別の状態があることが考えられる。

一方で、アメリカに住んでいるラテンアメリカ系の人々は英語の世界に囲まれており、その結果はいわゆる Spanglish を使用していることである。それはスペイン語の文法や発音に基づいて、英語とスペイン語の単語の混合を使用することである。

例 ; 「María tuvo un baby y está bien cute」

英語に関しては、ゲルマン系と呼ばれ、昔ラテン語やフランス語の強い影響を受けた。現代の英語の語彙の中では65%くらいはラテン語から取り入れられた言葉であり、歴史が古く慣用として、外来語と呼ばれていない。「英語固有の要素などをゲルマン系は日本語のやまとことば系にあたり、英語のラテン系は日本語の漢語系にあたる」(石綿敏雄：外来語の総合的な研究、253)。

ゲルマン系	ラテン系
happiness	felicity
begin	commence
deep	profound

外来語の種類

現代の外来語は全般的にいくつかの種類に分けることができる。意味的に、まず、一般用語と専門用語に分ける。しかし、専門用語は時々一般の生活のなかでも使われているので、区別するのは容易ではないこともある。英語からスペイン語に入ってきた外来語はほとんど同じように分けることができる。次に例を取り上げてみよう。

	日本語	スペイン語
一般の生活外来語		
一般の社会生活用語	カーテン、スカート、 オーケー、キュート	okey, cool, remover, reporte, sexy
インテリア外来語	メリット、ペンディング	líder
商業風俗外来語	ビジネス、トレード、マーケ ティング、ネットワーク	marketing,
料理	ステーキ、ハンバーガー	hamburguesa, steak
インターネット用語 ⁹⁸	メール、ウェブサイト	email, chatear, red
専門用語外来語		
電気産業用語	コンデンサー、スイッチ	condensador, switch
コンピューター用語	ソフトウェア、プログラム	software, mouse
経済関連用語	シンジケート、デフレ(デフ レーション)	trading
スポーツ用語	コーチ、テニス	fútbol, córner
病気医療関係用語	インフルエンザ、インスリ ン、クリニック	influenza,

外来語の特性

新しい事物などが社会に取り入れられると、もちろん、新しい言葉も取り入れられることが多い。したがって、自国語にない言葉は他の言語から取り入れるのは普通に見られることであるが、時々ある言葉があっても、外来語を使用することもある。例えば、日本語には「複写」という言葉があるが、「コピー」の方がよく使われている。しかし、外来語と日本語のものの単語を同時に使うこともある。例として、「ドライブ」と「運転」という単語があり、「運転する」という意味で「ドライブ」を使うことはない。一方で、ドライブは「行楽または自動車ですり乗ること」という意味である。

外国語を借用し、日本語にするのに、二つの手段がある。一つの方法は外国語の言葉を取り、だいたいそのままカタカナにすることである。もう一つは外国語の言葉の意味に基づいて、刺激的創作語という方法である。後者は明治時代から使われているが、戦後の後はそのような方法でできた語彙は非常に少なくなった。刺激創作語の例は「芸術」、「汽車」、「商業」などである。

⁹⁸ インターネット用語は専門用語であるが、日常生活で重要な役割を果たすので、一般の生活として扱う。

*** 婉曲語**

日本語の外来語の中では、婉曲語が多い。直接の表現があまりにも公然であるとき、外来語を用い、婉曲に表現することがよくある。例えば、「トイレ」、「WC」、性に関する表現にも外来語が非常に多い。「セックス」、「マスターベーション」、「ホモ」、「レズ」が「性交」、「愛撫」、「自慰」、「同性愛」の代わりに普通使用されている。そのような外来語の使い方はスペイン語にはなく、日本語の特徴であろう。

意味の違う外来語

英語から入ってきた外来語は英語の単語と意味が変わらないと思うのは当然であるが、多くの外来語は英語の言葉と違う場合もある。実際に全く異なる言葉もある。例えば、「クレーム」という言葉は「claim」からできた言葉であるが、英語の「claim」と全然違う。スペイン語では「esmoquin」という言葉は「smoking」から来たが、「喫煙」という意味ではなく、「タキシード」という意味である。

意味が狭くなることも非常に多い。例えば、英語の「building」は壁と屋根のある建物をすべて表すが、日本語の「ビル」は「洋風」と「高層」の意味で使用されている。

*** 和製英語**

「telephone」や、「television」はギリシャ語の単語を使って、ギリシャ人が作った言葉ではないように、日本人は英語の単語を使って、新しい言葉を作ることが多い。いわゆる和製英語は「日本で作られた英語」、または「日本独自の使い方をする英語」ということを指す。(加島祥造：英語の話。英語と日本語をつなぐバイパス、74)。

和製英語の中では和製複合語がおびただしい。普通は英語の言葉と一部分が一致することがある。前後ろ入れかわりこともあり、外来語では複合語であるが、英語では一語というものもある。次の表は多少の例を表す。

前部分が一致する	後ろ部分が一致する	前後ろ入れかわり	日本語では複合語、 英語では一語
ビーチパラソル beach umbrella	デコレーションケーキ fancy cake	ポテトフライ fried potatoes	ガードマン guard
フロアスタンド floor lamp	サイドブレーキ emergency brake	フラッシュニュース flash news	ブレザーコート blazer

一方、一致点がないものもある。例えば、ホームドラマ (soap opera) などである。日本語の中の元の英語の単語はもう日本語化され、日本語的に表現することは当然であろう。したがって、和製英語が生まれた。

*** 外来語の書き方**

外国語は日本語の中に取り入れると、日本語化し、変容する。外来語はカタカナで書かれるのは普通で、時々カタカナ語と呼ばれる場合もあるが、カタカナは外来語ではない言葉も含めていることがある。一方で、慣用として、もうカタカナで書かれていない外来語もある。例えば、タバコは「たばこ」も「煙草」も使える。コーヒーの場合はひらがなを使われていないが、「珈琲」も使える。

スペイン語の場合は英語の単語を取り入れると、スペイン語の綴りによって変容することは普通であるが、英語の綴りはそのままに残ることも多い。例えば、「sandwich」はスペイン語でそのまま書くが、発音はちょっと違う。しかし、「sánduche」という書き方もある。

「club」という英語の単語はスペイン語にしても、「club」と書くが、英語の発音と違って、[club]になる。日本語化の程度範囲の高い単語は、だいたい次の表に示す仮名で書き表される。すなわち、日本語の発音と一致して、書かれる。

ア	イ	ウ	エ	オ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	キャ	キュ	キ	ン (撥音)
カ	キ	タ	ケ	コ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ョ			ッ (促音)
サ	シ	ス	セ	ソ	ダ		デ	ド		シャ	シュ	シ	ー (長音符号)
タ	チ	ツ	テ	ト	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ョ			
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	パ	ピ	プ	ペ	ポ	チャ	チュ	チ	
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ						ョ			
マ	ミ	ム	メ	モ						ニヤ	ニユ	ニ	
ヤ		ユ		ヨ						ョ			
ラ	リ	ル	レ	ロ						ヒヤ	ヒユ	ヒ	
ワ										ョ			
										ミヤ	ミユ	ミ	
										ョ			
										リヤ	リュ	リ	
										ョ			
										ギヤ	ギユ	ギ	

		ヨ		
		ジャ	ジュ	ジ
		ョ		
		ビャ	ビュ	ビ
		ョ		
		ピャ	ピュ	ピ
		ョ		

一方、日本語化の程度がそんなに高くないときも、外国語に近く書き表す必要のときも（人名、地名の場合）、原音になるべく近く書き表そうとすると、次の表に示す仮名を使用する。それ故、外来語が日本語の音節構成を増加したと言われる。例えば、「ティ」、「ヴィ」、「ウエ」などという組み合わせは外来語を表記するためにできたものである。そうすると、「ミルクティー」、「フェアプレー」、「フォークダンス」などが書き表すことができる。

	シエ		イエ	ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ
	チェ		ウイ	ウエ	ヴォ		
ツア	ツエ	ウオ					テュ
ツオ		クア	クイ	クエ			フュ
	ティ	クオ					ヴュ
ファ	フィ	ツイ					
フォ				トゥ			
	ジェ	グア					
	ディ			ドゥ			
	デュ						

スペイン語の場合では、スペイン語で使用されていなかった文字が外来語を表記するため、使用するようになった。例えば、W、Kなどはもともとなかったが、「whisky」、「kilo」などを書くのに使われている。

* 音形の変化

諸言語の音声はそれぞれなので、他言語の言葉を取り入れると、自国語の音声の構造によって変容することは普通である。日本語の音節の構造においても促音という特殊音素を

除いて、すべて母音を含む。子音が二つ以上連続することがない。そして、「ん」を除いて、子音で終わる単語もほとんどない。それ故、外国語の言葉を取り入れると、母音を添加する。例えば、英語の「sectionalism」は日本語に入るとセクショナリズムになる。

音節化に対して、英語からきた「ランプ」をみると、英語では一音節であるが、日本語の見かたでは三つになるであろう。スペイン語の場合は子音で終わる単語があるが、音節末の子音は/t/や/tʃ/であることはまったくないので、語尾の子音に母音を添える。例えば、英語の「pamphlet」は「panfleto」になる。

一方で、スペイン語から英語に入る時、一般的に母音をつけたままで入るが、たまに母音を削り落とすこともある。例えば、「tornado」や、「banana」が取り入れられたときに母音をつけたままにしたが、「rancho」は「ranch」になった。

外来語が日本語化すると、外国語と日本語のあいだで対応のあるものはそのまま取り入れられるが、日本語にその外国語の音がないとき、日本語にある音に置き換えるのは普通である。しかし、前言ったように、外来語の表記に対して、日本語の五十音にない音を表そうとすると、特別な結合ができた。

例をあげていうと、日本語にはない「l」のある単語を借用すると、普通ラ行で表す。従って、「lighter」は「ライター」になり、「leader」は「リーダー」になる。

スペイン語にZは独立な音素ではないので、その音のある単語を取り入れると、Sになる。日本語にもスペイン語にもない/ð/という音のあるものを取り入れるときに、日本語の場合はザ行になるが、スペイン語の場合は/d/に置き換えることになる。例えば、外来語ではないが、「The Others」というアメリカの映画は日本語にしたら、「ザ・アザーズ」であるが、スペイン語にしたら、「The Others」と書くが、[de oders]という発音になる。

* つづり字発音

英語のつづり字からできた外来語は日本語にもスペイン語にもあるが、後者の方が多い。日本語では「デリケート」、「イメージ」などは英語の発音とあまり一致してない。“delicate”は[delikət]の発音で、「デリケート」は英語のつづり字からでてきたものだと思われる。なぜならば、「late」, 「mate」, 「gate」など、同じような語尾で、どれも「ケイト」になることに基づいて、「デリケート」や、「イメージ」という外来語が生まれたのであろう。

* 省略

日本語では外来語を省略するのは普通に行われる。例えば、「フロントデスク」は「フロント」と省略する。省略の方法は言葉の前の部分、中央部分、後ろ部分の省略がある。そ

の方法の例は次の表であげてみよう。

省略された言葉	もともとの言葉
前部分	
スピーカー	ラウドスピーカー
中央部分	
ボールペン	ボールポイントペン
後ろ部分	
プロ	プロフェッショナル

複合語に関しては、四つモーらになるように省略するのは普通である。例えば、「デジタルカメラ」は「デジタルカメラ」からできた外来語である。このように複合語を取り、それぞれの後ろ部分を省略すると、できる言葉が非常に多い。しかし、多少違う言葉もある。「たとえば、インフェリオリティ・コンプレックス」の前の部分を省略するとコンプレックスになる。じつはこうすると、自分が劣っているという、もとの意味の大事な部分が抜けおちてしまうのであるが、日本人にとっては、英語はやはり外国のことばであって、もともとなにを意味するのか、わからないで、使っているということがある。だから意味上大事な部分であっても、すこしも心配することなく、省略することができる」（石綿敏雄：外来語の総合的な研究 41）。

* 語形の国語化

外国語の単語を取り、国語化すると、本来の文法に合わせて、使用することは自然であろう。英語から入ってきた名詞を取り、日本語にすると、動詞が作ることができる。例えば、「トライ」という言葉は日本語で名詞であり、動詞とすると、「トライする」になる。形容詞の場合も日本語の形態に合わせて、使用する。例をあげてみると、「ハンサムな人」や、「デリケートな問題」などができる。ときどき美化語を使用することもある。英語からの言葉ではないが、例として、「おビール」や「おたばこ」という表現がある。

スペイン語にもそういうことがある。冠詞や、複数などを使用したり、性分類の語形を付けたりすることが普通。その上、スペイン語では英語の影響に対して、単語の面だけではなく、文法的にも影響を受けてきたのである。例えば、昔のスペイン語には受身形がめったに使われていなかったが、現代は英語の影響で、使うようになった。その上、名詞を次々に連ねて複合語を作るのは英語とゲルマン系の言語の特徴で、スペイン語にはあまり

なかったが、今はある。

英語	元のスペイン語	現代のスペイン語
Parent-children relationships	Relaciones entre padres e hijos	Relaciones padres-hijos
Car-bomb	--	Carrobomba, cochebomba
Protest songs	Canción Social (形容詞)	Canción Protesta

結論

日本語は外来語が多いと言われるが、他の言語の外来語と比べてみると、それはそうであるが、他の言語にもこういう現象がみられることがわかった。新しい表現、専門用語、国際語、婉曲語など外来語を使用すると、言語の語彙を豊かにする。

英語から日本語とスペイン語への影響をみれば、多くの言語において、とくに20世紀の後半期に英語の影響を受けるようになってきたことがわかる。その時期にアメリカの影響が大きかったのは経済、政治、外交、軍事、科学、技術、文化などの分野でのアメリカの力が強くなり、それは言語の面にもみえることであろう。

参考文献

Tozaka Emi / Ezaki J. Keiko : 「マExtranjerismos del Japonés」 Sociedad Hispanica del Japon, Casa España.

岸本 重陳 : 「国際化時代のためのカタカナ語・略語辞典」 旺文社 1990年

加島祥造 : 「英語の話。英語と日本語をつなぐバイパス」 南雲堂 1994年

石綿敏雄 : 「外来語の総合的な研究」 東京堂出版 2001年

外来語の表記 : <http://www.konan-wu.ac.jp/~kikuchi/kanji/gairai.html>

Spanglish : http://members.tripod.com/~nelson_g/spanglish.html

Sorokin Ellen: 'Spanglish' speakers mix home languages THE WASHINGTON TIMES

<http://www.washtimes.com/national/20021121-85016760.htm>

Jarque, Fietta: El castellano 'alucina' con el 'bakalao':

<http://www.geocities.com/Athens/2982/bakalao.htm>